

優秀賞 大阪府 尾崎 悠人 様 (中学生)

僕の母は体が弱く、僕が生まれる前から障害年金を受給しています。母は毎月病院に通い、医師から処方された薬を受け取り、それを欠かさず飲みながら病気と向き合ってきました。子どもながらにその姿を見て、病気を抱えながら生活をするの大変さを感じると同時に、それを支えてくれる制度のありがたさを強く意識するようになりました。

母が障害年金を受給していたからこそ、僕たち家族は生活の基盤を何とか整えることができました。特に僕や兄弟が生まれたことで適用された「子の加算」という制度は、経済的に大きな助けとなり、僕自身もその恩恵を受けて育ちました。子どもの頃はただ「少し安心して暮らせる」という感覚しかありませんでしたが、成長するにつれて、それがどれほど大切な支えであったかを理解するようになりました。学校に通い、友達と同じように学び、将来の夢を考えられるのも、この制度があったからこそだと思います。

世の中では「年金額が少ない」「受給開始年齢が上がっていく」などの問題がよく取り上げられます。確かに、社会の高齢化や財源の確保といった課題は深刻で、僕たち若い世代にとっても大きな不安となっています。しかし、年金制度を実際に利用してきた僕からすると、年金は単にお金をもらう仕組みではなく、「人が安心して暮らせるように社会全体で支える仕組み」そのものだと思うのです。

例えば、家族を亡くしたときに支えとなる遺族年金、病気やけがで働けなくなったときに頼れる障害年金、そして子どもを育てるための子の加算。これらはすべて、困ったときに誰もが孤立しないための大切な安全網です。僕の家庭もその安全網に守られてきました。もし制度がなければ、母が病気と闘いながら僕たちを育てることはずっと難しかったはずです。

僕自身、この経験から「支え合う社会」の価値を強く感じています。普段は意識しにくいけれど、誰もが突然の病気や事故、家族の不幸に直面する可能性があります。そうしたときに「制度があるから大丈夫」と思えることは、精神的にも大きな救いになります。僕にとって年金制度は、安心して未来を考えるための土台であり、社会の優しさを形にしたものだと思います。

これから僕は社会に出て、年金を納める立場になります。その時には、これまでの経験を

忘れず、「自分が支えられてきた分、今度は支える側になる」という気持ちで責任を果たしたいと思っています。年金を納めることは単なる義務ではなく、次の世代や困難に直面する人を支える行為です。僕が納める一部のお金が、将来の誰かの生活を守る力になる。そのことを思うと、年金を支えることはとても大切で意味のあることだと感じます。

年金制度は、世代を超えて人と人とを結びつけ、未来を守る仕組みです。僕が受けた恩恵は、これまで制度を支えてきた多くの人々の思いと努力の積み重ねの上にあります。そのことを忘れず、これからも年金の大切さを周りの人に伝えていきたいと思っています。そして僕自身がその一端を担うことで、将来の子どもたちが安心して育ち、夢を描ける社会を残していくように努力したいと考えています。